慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	河上肇の思想遍歴 : 『社会主義評論』と「無我苑」の頃 : 「社会主義者」と「志士仁人」の間
Sub Title	The change and transformation in the thought of Hajime Kawakami, the age of 'Shakai-shugi hyoron and Mugaen'
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1988
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.81, No.2 (1988. 7) ,p.158(14)- 171(27)
JaLC DOI	10.14991/001.19880701-0014
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19880701-0014

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」81巻2号（1988年7月）

河上肇の思想遍歴

――『社会主義評論』と「無我苑」の頃：「社会主義者」と「志士仁人」の間――

飯田　鼎

（一）河上肇と「無我苑」の運動
（二）『社会主義評論』に現われた大学教授
（三）河上肇と平民社の運動
（四）社会主義者と志士仁人

（一）

思想家河上肇の経済学者としての出発は，明治38年，日露戦争の興奮未だ醒めやらぬ時期に発表された『日本尊農論』からであることは既に指摘したところであるが(1)，しかしこの時代，彼の思想は，色濃く国民国家的な観点によって彩られ，後年のマルクス主義に基づく社会主義者としての片鱗を窺わせるものは少ない。では，彼は社会主義思想やその運動にたいして，無関心であったかといえば，決してそうではなく，時恰も日露戦争を契機としてたかまりつつあった平民社を中心とする社会主義運動と，それが辿った戦後の急激な凋落と分裂の経過にはかなりの関心をよせ，今日，これらの論説を読む者は，河上の思想家としての見識が，きわめて先駆的であることに驚かされるであろう。

若き日の河上の思想は，故郷山口での儒教主義に基づく教育と，長州という幕末維新の政治的変革を推進するのに決定的役割を果した藩閥勢力の精神的支柱ともいうべき愛国主義――その象徴的人物としての吉田松陰――によって決定的に影響され，同時に東京に出て先進的なヨーロッパ諸国の学問の洗礼をうけたことによって，おそらく明治30年代末期の彼の思想は，儒教とならんでヨーロッパの合理主義そしてさらにキリスト教によってその魂を震撼させられるほどの衝撃をうけたのであった。そうしたいわば諸思想の混沌たる未整合の状態のなかで，彼が「いかに生くべきか」について真剣に思い惑ったのは，明治38年，日露戦争前後の騒然たる社会状況にたいする戸惑いや苦悩と無縁ではありえなかった。その意味で，明治38年10月1日から12月10日まで，『読売新聞』に連載された『社会主義評論』は，こうした河上の思想的遍歴を辿る点で，きなめて重要な文書であろう。

注（1） 拙稿「河上肇の初期経済思想―『日本尊農論』を中心として」（『三田学会雑誌』，1987年8月，第80巻3号，を参照）。

まず河上は何故，この時代に『社会主義評論』を執筆するに至ったのであろうか。ひとつには当時，『読売新聞』主筆足立北鷗が，河上と同郷の山口出身であり，しかも中学時代に彼が教えを享けた思師でもあったからであったが，しかし彼の胸中には時勢にたいして沸々と燃えたぎる何らかの感情があったのではなかろうか。これは間もなく，明治39年1月，読売新聞社から単行本として千山萬水楼主人のペン・ネームで刊行されたが，注目すべきことは，「附録」として，「無我愛之真理」という小篇をのせていることである。この経緯について，河上はその『自叙伝』に，つぎのように書いている。少し長くなるが，河上の思想遍歴を知る上で重要と思われるので引用することとする。しかしその前に，彼が，バイブルの「山上の垂訓」によって衝撃をうけ，当時東京郊外の巣鴨にあった大日堂を本拠にして運動を続けていた伊藤証信の「無我の愛」の活動を，バイブルの思想，すなわち絶対的非利己主義の実践と考え，これに入信するところから，叙述は始まる。後に河上は，無我苑での活動を誤解していたことを悟り，この運動から去り，やがてはこれを不道徳なものとして非難するに至るのであるが，そのときは真剣であったことが，つぎの叙述から窺うことができよう。

「四日（明治三八年十二月……引用者）に私は初めて伊藤氏を訪うた。そして氏の言わるるままに，私はその翌日，東京帝大の農科大学，学習院，専修学校，台湾協会専門学校等，それまで私が教員となっていた学校に残らず辞表を出した。一切の教職を抛ちながら，これからどうして糊口を支えるかなどいうことは，全く私の眼中になかった。

七日にはまた，当時読売新聞に連載しつつあった『社会主義評論』の「擱筆の辞」を書き了えた。私はそこで半生の懺悔をなしたが，これまた伊藤氏の示唆によるものである。

この『社会主義評論』というのは，私が千山万水楼主人の筆名で書いていた，謂わば私の出世作で，それは意外にも読者の好評を博し，そのため新聞の発行部数は急に激増していたような訳であったから，『擱筆の辞』は殊に世間の耳目をひいた(2)」。

これから明らかなように，彼の思想の根底には，利己心の否定，いわゆる絶対的非利己主義があり，社会主義とは，そうした思想の実践として把握されていることは明らかで，そのような観点からは，絶対的非利己主義の団体と考えて無我苑の活動に参加していたが，その実践の過程で同志の行動にもある種の疑問を生ずることとなった。

「蓋しかの無我愛同朋が，自ら全力を献げて他を愛するを趣旨としながら，その行動深く余を感動せしむるものなく，殊に其夜間睡眠を貪るが如きは，未だ全力を献げざる徴なるべしと認めたるに由るなり。故に余は翌九日に至って全く無我苑より独立し，而して余自らは爾今寝ねず休まずしてこの真理を伝へ，使用に耐え得る限りにおいて此五尺の痩躯を使用し尽し，死して後已まんのみと覚悟したり。当時の余が『全力を献げて他を愛す』といへる文字を如何に解決し，如何に極端なる思想に走りしかは，之を以て想像するに足るべし。人或は余が狂愚を嗤わんも，当時の余は極めて真摯なる心をもって，此の如く決意するに至りし也。而して余が

注（2） 河上肇著『自叙伝』(一)，岩波文庫版，99～100頁。

最も奇異なる体験を経たりしは，実に此の決意を為せし当夜なり[3]」。

河上のこの「無我愛」の運動への陶酔とその時期の社会主義開眼とは，一体どのような関係にあるのであろうか。一時の軽挙盲動や誤解あるいは青年らしい熱狂という解釈をもってしては説明しきれない何かが，この両者の関係には秘められているように思われる。終局的には利己・利他の問題から始まり，市民社会と社会主義にかかわる現在の深刻な事態にも深くかかわっているようにも思われる。この点について明らかにすることが，ここでの主要な目的である。

(二)

千山万水楼主人という筆名によって，『読売新聞』に登場し，華麗な文章と斬新な問題提起により洛陽の紙価を高からしめた『社会主義評論』は，不治の病を得て西欧より帰国し，房総で病気療養に努めているという憂愁の心理のなかで，社会主義にかんし書簡の形で私淑する友人に書き送るという形をとっている。そしてその執筆の動機について，第一信において，つぎのように云う。

「夫れ社会主義の本質たる，固と経済上の一主義たり，然も其関聯する所，政治，宗教，倫理，道徳，其他社会各般の事項に及ぶ，随って之れが完全なる批評は，是等社会各般の諸学に精通する士を待って初めて聞くを得べし……[4]」。

ところが，わが国の社会主義にかんする著述の多くは見るべきものなく，とくに「其社会主義者の手に成れるものは，概して偏狭独断の弊に陥り……」とのべていることは注目に値する。当時，社会主義者の手に成る社会主義論といえば，幸徳秋水の『社会主義眞髄』などがもっとも著名であったが，それにとどまらず，平民社に結集した堺利彦，西川光二郎，片山潜，石川三四郎には，社会主義にかんする論文著作がきわめて多かったが，河上はこれら平民社に結集した社会主義者の言論に納得しえないものがあったと思われる。

しかも興味深いことは，たんに「二三知名の社会主義者」の理論的把握について，これを分析し批判するにとどまらず，「更に騎虎の勢を得ば，之れに対する官府の政策態度に就きて其の得失を論議することあらしめよ」とのべていることである。ここには，政府にたいする批判の姿勢が滲み出ているのであって，一方において，平民社を牙城とする社会主義者の思想を批判しつつ，他方，これとは対照的な立場に立つ東京および京都帝国大学教授の言論に鋭い筆鋒を加えていることである。

『社会主義評論』「第二信」において河上は，いわゆる「七博士事件」をとり上げ，その態度が「余は只，彼等が一面名を求むるに急に他面利を望むの甚しきを見たるの外，更に其頼もしきを発見する能はざりき」となかなか手厳しい。

いわゆる七博士事件とは，日露戦争勃発の危機迫る明治36（1903）年10月，社会主義者幸徳，堺

注（3） 上掲書，100頁。
（4）『河上肇全集』，第3巻，6頁。

およびキリスト者内村鑑三が，黒岩涙香の『萬朝報』紙の反戦論から主戦論への転向に抗議して退社したその直前，すなわち同年6月，東京帝国大学教授の七博士は，対露強硬路線を歩むことについて，政府に最後の決断を促すべく意見書を提出した事件である。七博士とは，富井政章，戸水寛人，寺尾亨，小野塚喜平次，金井延，高橋作衛，中村進午であった。この七博士の行動が，言論の自由という観点から河上の批判の対象となった。

「聞説，日露開戦の以前よりして，所謂七博士なるものあり，常に強硬の論議を敢てし，偶々政府当局の忌諱に触れて，同志の一二為めに教授の職を解かるるに至れりと，此一事小なるが如くにして，余は実に学界の一大問題たるを思う(5)」。

河上は，七博士の論調の過激さについて問題にしているのではなく，仮に軽率な言動があるにしても，大学教授が，教授会の議決を経ることなく，まさに国家権力によって免職あるいは辞職に追い込まれるという事態，そのことにこそ問題があるという。言論の自由について河上は絶望していた。

「若し大学教授たるものは，常に政府当局者の政策に反対するの論議を公にする能わざるものとせんか，是れ実に天下の最大怪事にして即ち学問なき也，大学なき也……(6)」

「余は不幸にして，学者言論の自由が近き将来に於て我国に実現すべしと信ずること能わず，然り，余は断じて夢想だもすること能はず，足下乞ふ暫く言論自由の是非を論ずるを止めて，学者が言論に忠実なりや否やを一顧せよ」とのべているように，文部省の処置の不当を攻撃する前に，これら帝国大学教授の思想的一貫性，その態度の純粋さについて疑いを抱いたことは明らかである。「始め七博士の名，世上に喧伝せられ，或は史上名を留むるの栄あらんとする望みあるや，二三の同僚風を望みて之れが運動に加入するあり，而して一たび文部の警告に接するや倉皇同志の班を脱するもの二三，其の他の残党亦急に其の鋒鋩を収めたるの観あり……」。

河上から見れば，これら東大教授の言動は，まさに売名的なものとして考えられ，それゆえに彼は，社会政策学会の有名な指導者，東大教授金井延と京大教授島田錦治の学問的姿勢にたいし，鋭い批判の矢を放ったのである。

「余は今回の一事に於て深く学者の将来を憂ふるを禁ずる能はず，夫の社会主義の如き，我が政府が之を悪むこと蛇蝎よりも甚だしくするもの，東西両京の大学教授は，此の世界の大思潮に対し，果して公平に誠実に自家の所信を公にし，以て世を教ふるの勇ありや否や，其踏跙逡巡たること亦今日の時局問題に於ける如くならざるや否や(7)」。

これはまた実に勇気ある思い切った発言ではなかろうか。なぜなら，この文章は白面の一青年学者が，少壮気鋭の博士にたいして，学問的良心の何たるかを問いかけると同時に，彼らの社会主義研究の水準，いわばその学問研究の内容を問題にしていることに注意しなければならない。

注（5） 前掲書，7頁。
（6） 前掲書，7頁。
（7） 前掲書，8頁。

「東京の金井延，西京の田島錦治両博士は夙に之れが研究に志せしものと聞く，然るに今猶杳として何等の説を聞く能はざるは何故ぞ，嗚呼社会主義は今後の一大問題なり，否，既に目前に瀰漫しつゝある事実なり，然も之れが公平なる批判は，得て官学者流より聴く能はずとせば，民間学者の任務も亦重い哉，足下以て如何と為す」[8]。

これはまさに，東西，両帝国大学教授にたいする挑戦であり，弾該の文章ですらある。世のいわゆる大学教授なる者も，いかに怠慢無精にして恥知らずの者が多いか，河上は実に，金井および田島両教授の著作にたいする批判を通じて曝露したものであり，しかも，一民間新聞に連載されたとすれば，両教授はもとより，世上一般の読者にとっては一大衝撃であったにちがいない。これは今日，学問研究に志す者にとっても教訓的というべきであろう。

河上はまず，京大教授田島錦治博士の『日本現時の社会問題附り社会主義』について，そして東大の金井延教授については，大学での講義，「工業政策論」について容赦なく批判する。この批判は痛烈を極め，若き日の河上肇の学問にたいする熱情が，読む者に脈々として伝わってくる感がある。社会科学にたいする研究者ならびに学生の関心が，一般に衰えつゝあるかにみえる今日，彼が憤然とし，慷慨するところのものを読み，追体験することも無駄ではあるまい。

「要するに今回の戦役に際せる学者の態度に於て，余は只彼等が一面名を求むるに急に他面利を望むの甚しきを見たるの外，更に其頼もしきを発見する能はざりき」[9]。

これはまた何と痛烈な攻撃的な一節であろう。「売名と利益」を求めて動く大学教授，河上が，田島，金井両教授の行動に見出したものはすなわちそれであった。

河上の経済学的認識のなかで，一貫して渝ることのなかったもの，それは倫理的に峻厳，否むしろ求道的な態度であった。

「北鷗詞兄，足下資性温厚，夙に長者の風を具へ，殊に人の悪をいふを好まず，而して余が性，幼より狷狂不介，常に人の悪を罵るを以て楽とす，余既に前信に於て，猶進みて以て，其の更に甚しき一例を挙げんとす，……」[10]。

この一節は，後の田島錦治氏の著作にたいする痛烈な批判の伏線をなすものであり，その著『現時日本の社会問題附り社会主義』のうち，田島氏の社会問題に関する著述の部分，すなわち「本論」の部（実は第一篇総論とあり）が，紙数わずかに56頁，そして明治34年東京において創立された日本最初の社会主義政党，社会民主党創立者のひとり，河上清氏著わすところの第二篇以下最後の第四篇まで（すなわち所謂「附り」）は300余頁あり，この点について河上は，この著が「奇妙な著述」であると喝破した上でつぎのように田島の態度を論難する。すなわち，「これ宜しく『社会主義附り日本現時の社会問題』たるべし，ことさらに之れを以て『日本現時の社会問題附り社会主義と為すは実に読者を詐くものなり」としている。しかも「明治卅四年に発表せられたる社会民主党

注（8） 前掲書，8頁。
（9） 前掲書，8頁。
（10） 前掲書，9頁。

の宣言書をば，『社会主義専攻田島錦治先生』が一読だもせずとありては，学者の其の志す所に冷淡なる意外千万とする所」とのべているのは尤もであろう。「一国民衆の師表たるべき大学教授にして遂に斯の如しとせば，本邦将来の論壇も亦悲しむべき哉，余多少の感慨なき能わず」と結んでいるが，しかし東京帝国大学教授金井延にたいする河上の批判は一層激烈である。

「昨日は砲一発を京都大学に放てり，今又更に一発を東京大学に放たんとす」とのべたのち，金井教授の講座の内容にふれ，その講義に，まことに痛烈な批判を，つぎのように展開する。

「……某々博士等近時頻りに政治の得失を論じて東奔西馳，席暖るの遑なしといふ。世人乃ち見て以て壮と為し快と為し，彼等の声名為めに俄に揚れるものの如し，然れども余は不幸にして見て以て壮と為す能はず快と為す能はず，寧ろ其行動の事の前後緩急を誤れるを思ふ，これ抑も何故ぞや，他無し，試みに金井博士の大学に於ける講義を見よ，工業政策学は氏が最も得意とする所，しかも其講義たる，字々句々ショーンベルヒ経済全書の翻訳なり，甚だしきに至りては，其の脚注に至る迄更に一字の増減あるなし……」[11]。

外国書の翻訳を講壇において講ずるというのは，金井延に限らず，今日，大学において「教科書を読む」という形式で講義を行う教授が必ずしも少なくないことを想えば，彼の教授態度が格別非難されるべきものではないと思われるかもしれない。しかし河上にとっては，大学の講壇とは，まさに信仰告白の場，Professor とは，神の前に教義の番人として人々に教説することを職責とすると感じられたのではないか。河上は実に，象牙の塔にこもってアカデミズムを謳歌することを大学教授の本分と心得る帝大教授金井延を，いわゆる曲学阿世の徒と断じて憚らなかった。つぎの一節はまことに痛快なものがあろう。

「然るに，博士傲然として教壇に登り，ノートを出して其翻訳を朗読す，而して数十の学生は耳を側て筆を走らし，孜々営々，一語をも記し漏さざらんとし，苦心惨憺を極む，斯の如くすること約一箇年，彼等学生はショーンベルヒ経済書中工業経済の一小部分の翻訳を筆記し了はる也，学生の得る所唯だ斯くの如きに過ぎず，夫れ工業政策学中最も重要なるものは工業的労働者の問題にして，而して此問題たる社会主義乃至社会政策と関聯して氏の最も得意とする所といふにあらずや，而も其講義の無雑作なること此の如し，其研学に忠ならざるも亦甚しからずや，何の暇ありてか，能く政治を論じ外交を議し，運動し，上奏するを得べき……」[12]。

この一節には，ショーンベルヒの経済書の翻訳を講壇で朗読する金井教授の粗雑な講義態度を批判すると同時に，より重要なことは，学者の政治活動にたいする禁慾的姿勢の必要性を提言していることであろう。おそらくこれは，さきの七博士事件はもとより，工場法制定のための諮問委員会ともいうべき農商工高等会議のメンバーとして，あるいは治安警察法などの治安立法についての意見具申において，帝国大学における社会政策担当教授としての権威の下に，華々しい役割を演じた金井にたいする痛烈な批判であるが，とくに，学生は教室において聴くことを強制され，教授の採

注（11） 前掲書，11頁。
（12） 前掲書，11～12頁。

点如何によって その将来が左右される以上，「如何に乱暴横着を極むる講義と雖も，満堂耳を傾けて之を謹聴す，人間生れて大学教授と為る，亦多幸なる哉」というのは，ひとり帝国大学教授金井延のみならず，一般に世の教授諸氏にたいする皮肉としてうけとらざるをえない。

だが，金井博士の行動において，河上にとってとりわけ忍し難かったのは，ショーンベルヒの翻訳紹介の域を脱しない自己の講義を聴講した学生のひとりが，金井の講義を手本として著書『工業経済論』を公刊したことにたいし，金井が「他人の名義を冠するにも拘らず，実際余の東京帝国大学其他諸学校に於ける講義の大体を 筆記したるに 過ぎざるものあり」とし，「斯の如き事を敢てする破廉恥漢は鼓を鳴して攻撃し之をして将来社会の表面に立つ能はざらしむるを至当とす……」とのべているのにたいしてであった。河上の論難は徹底的である。

> 「盗賊(ぬすっと)たけだけしいとは此の事なり，博士乞ふ暫く反省する所あれ，瓜の蔓に瓜の成りたりとて何の咎(とが)めかこれあらんや，盗品を盗みし者固より盗賊たるを免れずと雖も，他人の製品を盗みし者も亦斉(ひと)しく盗賊たらずや，嗚呼堂々たる大学教授にして此の如し，世事凡そ知るべきのみと語り了りて呵々大笑す」(13)。

明治39年といえば，金井を中心とする日本社会政策学会は，社会問題考究の私的懇談会の域から本格的な経済学会，経済学研究者の全国的な組織，日本社会政策学会として脱皮し，やがて「工場法問題」をテーマとして第一回大会を開催しようとするわずか数年前にあたっている。河上がもし学者として世に立とうとすれば，この学会に加入し，令名高い帝国大学教授の推挙が必要と考えられたこの時，河上のこの勇気ある，しかし学界の権威者に対して無謀とも思われる批判は，一体何に由来するものであろうか。この点について考える前に，当時の河上における社会主義認識およびその批判について考察することにしよう。

(三)

河上の金井延にたいする批判が，痛切をきわめたにもかゝわらず，26歳の青年の社会主義認識は浅く，到底，金井に及ぶものでなかったことは明らかである。この点は後に明らかにするとして，まず彼の，当時の日本社会主義運動，とくに平民社の運動についてふれているところをみるに，彼は，平民新聞を中心としてこの運動に従事する人々の思想と大義を高く評価しつつも，その党派性を批判している点に注目しよう。

平民社は，明治36年，日露の風雲次第に急をつげる頃，反戦平和主義を信条する社会主義者，堺利彦および幸徳秋水が，非戦論から主戦論にその論調を転換させた『萬朝報』を退社，新たに平民社を創設し，『平民新聞』を発刊したことにはじまる。キリスト者内村鑑三も退社したことはよく知られている。その後，片山潜，西川光二郎，石川三四郎，荒畑寒村等が加わり，日露戦争中を通じて一貫して反戦運動を展開した。この運動にたいして河上は関心を抱きつつも，日露戦争後，平

注 (13) 前掲書，12頁。

民社内部の思想面での不統一からする葛藤と対立から解散に追い込まれ,『平民新聞』に代って『直言』が刊行された。しかしこの運動も又停滞し,反戦運動によって一躍その名声を高めた『平民社』同人は分裂,そして解散という危機に直面した。

> 聞説日本民主社会主義者の本城たりし平民社は,今や解散の非運に遭遇せりと,政府の官人或は冠を弾きて之を笑はんも,書生一管の筆,時に天下を動かすの力あり,知らずや,宰相旧に依りて不義の富に誇り,妓に戯れて一夜に千金を投ずるの豪遊を為すの時,元老依然として天下の公権を私し,事に托して公課の負担を免かるゝの時,第二の『革新文学』正に将に起らんとするを,恐るべし,嗚呼懼るべし……」[14]。

ここには,平民社の社会主義よりも,政治の要路にあって,政治に携わる伊藤博文等の行動非難の文章が激越であるが,同時に平民社の運動にたいしても,かなり批判的である。彼は平民社の運動にある種の共感と同情を寄せながらも,しかもなおこれによく同調することはできなかった。

友人への通信という形で書かれている「第九信」および「第十信」は(近世社会主義の起因)と題し,平民社への感想をつぎのようにのべ,その活動を評価する。

> 「足下,余は平民社解散の報を得てより,実にいふべからざるの感想に充されたり,然り,政府が多年彼の一派に加へたる直接及び間接の迫害の如何に甚だしかりしかを想起し……彼派一派の結社集会が殆ど常に禁止せられ解散せられたるの事実を回想し,幸徳,西川,堺の諸氏が言論に罪を得て,牢獄に投ぜられたるの事実を回想し,而して是等諸氏が,斯のあらゆる迫害と圧制に対して苦戦奮闘頗る力めたるに関らず,遂に剣折れ矢竭きたるかと想像せば,余安んぞ多少の感慨なきを得んや」[15]。

孤軍奮闘の「主義者」にたいする彼の熱い共感の情を読者は察することができよう。しかしそれにもかかわらず,ナショナリスト河上の胸中には,到底同調することのできない感情がわだかまっていた。「政府が是等諸氏に対し,此の如きの迫害を逞ふする所以のもの,抑も何処に在るや,……然り尊王忠君の思想の念に至りては,彼等は我国民中最も之を欠如するものの一たらん,足下,此の一事は彼等一派があらゆる権威権力を以て迫害制抑を蒙る最大の原因に非らざる歟」。

吉田松陰の熱烈な崇拝者でもあった河上,「言論の自由は天下の大法なり,然らば学者をして言論の自由あらしめよ,社会主義をして言論の自由あらしめよ」と叫ぶ河上は,同時に「足下,余は敢て平民社一派の人士の言論行動を是認する者にあらず,否な其軽挙妄動の状は余の屢々眉を顰むる所なり」と非難する者でもあった。忠君愛国の思想を平民社に求めるとは又,いわゆる「木に縁って魚を求める」に等しく,何という矛盾した発想であろうか。ともあれ,今少し彼の云うところを聞いてみよう。

河上は,明治38年4月発行の『直言』紙第1号二面の一部にあらわれた論調のなかで,すべての犯罪や罪悪の原因を「貧困」に帰している点が,正鵠を失していることを指摘し,つぎのようにの

注(14)『河上肇全集』,第3巻,19～21頁。
(15) 前掲書,21頁。

べている。「母を殺すも貧困の為なり，堕落情死も貧困の為なり，万引も貧困の為なり，あらゆる罪悪は，凡て貧困の生む所なりとは，即ち彼等の社会観なり，思ふに人若し卒然として斯の如きの記事を読まば，頗る奇異の感あらん，然れども，怪む勿れ，余の既に述べたるが如く，実は近世社会主義の始祖たるカール・マルクスの『物質的歴史観』の誤解乃至誇張に過ぎざるのみ，只余の窃に憂ふるは，近時平民社の諸氏梢々衣食に乏しといふ，『窮して濫す』を以て主義とせる彼等一派，或は母を殺し，或は堕胎し，或は情死し，或は万引せんこと是れなり，呵々」[16]。

この一節には，河上の社会主義理解の未熟さと，平民社の運動それ自体にたいする偏見と独善が支配していることに注目しよう。この点について明らかにするためには，この時期の明治社会主義運動について一瞥しておく必要がある。

荒畑寒村はその著『平民社時代』のなかで，つぎのようにのべている。

「『平民新聞』に代った週刊『直言』は単にその紙幅，体裁，内容，名称が変っただけで，『平民新聞』といささかも趣きを異にせず，そして欄外に『本紙は日本社会主義の中央機関也』と大書してあるのを見た全国の同志は，大いに士気を鼓舞されて初めて愁眉を開いたであろう[17]。」

これをみても明らかなように，『直言』は『平民新聞』の後継紙であり，その無政府主義的傾向は歴然たるものがあった。しかし彼等は，無政府主義を標榜しつつも，実際には，さまざまな社会主義思想の混然たる連合体であり，『直言』は，週刊誌で明治38年1月に発行され，折しも1905年の第一次ロシア革命の勃発がわが国にも影響をあたえ，この新聞は，このような外国の社会主義運動に強烈な関心を注いだことは明らかである。

明治38年1月から9月までの9カ月間に，『直言』は32号を発行しているが，これが廃刊に追い込まれたひとつの原因は，アメリカ，ポーツマスにおける日露講和条約の結果に激昂した民衆が行った，日比谷などにおける焼打ち事件であろう。八面から成るこの週刊新聞は，第一面は社説および英文欄，第二および三面は「内外時事」と題するニュース解説，第四および五面は，堺利彦，木下尚江，石川三四郎などの社会主義者の評論および論文をもって埋められ，第六面は，社会主義の名著にかんする翻訳および紹介，あるいは当時の大学教授などの説についての諷刺欄，そして第七面は，東京および各地の研究会の現状，当時の社会主義者が運動を拡大するための社会主義文献やパンフレット販売のためのいわゆる伝道行商の記事，最後の第八面は広告という，今日，読んでみてもまことに充実した内容を備えている[18]。

この新聞の歴史的意義は，たとえば2月5日号では，「ガポン長老の檄」，「弁護士の決議」，「名士捕縛」，「コサック兵と職工」，「職工の鉄道攻撃」，「ゴルキーの拘留」など，一連のロシア革命のニュースが伝えられ，2月12日号では，「日本横須賀における船渠（どっく）会社の同盟罷工は，必ずしも露

注（16） 前掲書，23頁。

（17） 荒畑寒村『平民社時代』，中央公論社，1973年，248頁。

（18） 筆者はかつてこの新聞を読み感銘をうけ，紹介したことがある。拙稿「明治社会主義史料にあらわれた外国社会主義運動――『直言』を通じてみた――」，『三田学会雑誌』，第54巻6号（1961年6月）を参照されたい。

国革命の飛火にはあらざるべしと雖も，革命の気運が欧洲の天地に漲れることは実に疑うべからざるものあり」とのべ，ロシア革命と日本の運動との関係に着目している。

また河上の思想との関連で注目すべきことは，6月4日および11月号に，「マルクスの学説」と題し，ウィスコンシン大学教授イリー（Richard T. Ely）の『独・仏における近世社会主義』を訳載していることである。河上の『社会主義評論』に比べて，はるかに先駆的なのは平民社同人，とりわけ堺利彦（枯川）によるイギリス社会主義思想の紹介，とくにロバート・ブラッチフォード(Robert Blatchford）の一般に愛読された『メリー・イングランド』（Merrie England）の抄訳が掲載され，そのほかにもハインドマン（H. M. Hyndman）の思想を「社会主義の経済論」と題して，6月18日から7月16日まで，6回にわたって掲載していることであろう。

河上の社会主義認識が依拠している著者として，サン・シモンの研究者ジョルジュ・ウェイユやカール・グリュンベルヒ，あるいはイタリアの社会主義研究者アキレ・ロリアが重要であろう[19]。マルクス主義にかんする知識も，多くこれらの二次的史料を消化してえられたものである。そのためか，プルドンを「感情的社会主義者」と，よく理解できない定義を下しているのは，誰の影響によるものであろうか。

以上のように，河上は，日露戦争の前後，日本社会主義運動とその思想のメッカであった平民社に，一定の距離を保ち，これらを批判的に眺め，ある種の影響をうけ，反戦平和運動にたいしても，心情的には同情しつつも，その行動には賛成しがたいというように，複雑な心境にあったと思われる。だが注目すべきことは，河上が，平民社同人と同じく，トルストイの反戦平和論に共鳴し，平民社の運動に熱い共感を示している点である。彼は，『直言』第三十号に掲載された平民社同人安部磯雄の反戦平和の呼びかけにたいするトルストイの返書を紹介し，彼が「然れども予は総ての尊敬する友人に対して然（しか）する如く，足下に対しても亦極めて真摯ならざるべ可らず，而して予は社会主義に賛成せざる事を足下に告げざる可らず」という一節から，トルストイの反社会主義が何処から来るかについて，「人間の真の幸福は精神的即ち道徳的にして，其の中に物質的幸福を包含す，而して此の高尚なる目的は，国民及び人間を組織せる一切の単位の，宗教的即ち道徳的完成に依りてのみ到達せらる[20]」という一種の倫理観に共鳴し，これをもって平民社同人の「物質的態度」を批判する。

河上の社会主義認識は，彼の生涯を通じて一貫して追求しつづけた命題，「人間存在における利己心と利他心の葛藤」すなわち，経済学的には，「市民社会における経済と倫理」の問題を胚胎させ，後に大正8年，京都帝国大学教授となり，やがてマルクス主義経済学者としての名声高まり，他方，古典派経済学にかんして思索と研讃を深めつつあったときも変わることがなかった。こうした精神主義的あるいは観念論的な社会主義の理解は，一代の文章家として知られた幸徳秋水の『社会主義真髄』にたいしても，そのあまりにも「物質主義」的態度を批判し，幸徳が「回顧すれば，旧社会

注（19） 前掲，13～14頁。
（20） 前掲，26頁。

の争訟罪悪の種子は，皆な社会組織の不完全に起因せるものにて……犯罪の生ずる原因は民の衣食を得ざるに在り，今の社会にては人皆な衣食に苦まず，従って犯すべき罪もなし」とのべているのにたいし，河上は，「観じ来たれば犯罪の原因たる一にして足らず，『犯罪の生ずる原因は民衣食を得ざるに在り』といふは，畢意するに真の空想のみ」と論ずるのをみれば，その思想が，どれほど観念的であるかを窺うことができる反面，彼の生涯を通じてみれば，この観念的精神主義，禁欲主義，従ってストイシズムは，その経済学者としての研究態度，大学教授としての生活および昭和初期の共産党員としての活動を一貫して貫流しているように思われる。

しかしこのようなある種の偏見と独善に支配された『社会主義評論』は，平民社の運動を批判しつつ，決定的な誤謬を犯している個所も少なくない。困窮の救済を論ずる社会主義を大別して，「或は民主社会主義と為り，或は国家社会主義と為り，或は基督教社会主義と為り，国際的社会主義と為り，農的社会主義と為るなり……」としたのち，「民主社会主義」について，

> 「民主社会主義は一に科学的社会主義，極端社会主義，マルクス派主義，純正社会主義等と称せられ，殊に単に社会主義といふ時，世上必ず此派を指す，謂わば社会主義の親玉なり。而して我国に於て平民社一派の主張する所も亦之に外ならず」[21]。

としているところである。河上の言うところの「民主社会主義」が，ドイツ社会民主党のいわゆる「社会民主主義」であることはともかく，平民社は当時，アナキズムの影響が強く，マルクス主義をもって一貫していたのではなかった。それらを含め，さらにキリスト教思想をも包含した広い意味の社会運動思想の連合体であり，それが後に分裂の重大な原因となったのである。

以上にみるように，河上の若き日の力作『社会主義評論』は，西欧の先進思想としての社会主義の紹介としては甚だ意欲的かつ斬新であるが，しかしその日本の現実に行われる運動――たとえば平民社の反戦運動にたいする理解，批判ないし評論となると，まことに的はずれであり，間違ってさえいる場合が少なくない。河上は第一次大戦後，吉野作造等を中心とするいわゆる大正デモクラシーの開花の時期に，古典派経済学の研究から次第にマルクス経済学の堂奥深くつき進み，そして跪くことになるのであるが，印象的なことは，後に日本共産党創立に参画し，運動を指導した堺利彦や山川均等とはほとんど接触がなかったことである。彼が日本共産党に加入し，地下活動に入る頃には，堺は共産党から脱退しているので，平民社の時代，河上が堺等にたいして一種のクールな関係を保ったように，大正から昭和にかけて日本共産党が理論的に大きな影響力を社会主義運動にたいしてもつようになり，まさに河上が一共産党員として地下運動に入ったときも，没交渉であったのではなかろうか。

すでに見たように，この時期河上は，新歴史学派の強い影響下にあった金井延を総帥とする日本社会政策学会にたいする強い不信の念とともに，平民社同人の孤立した運動にも心から共感することができず，むしろマルクス主義と無政府主義などの革命的社会主義とは対立的なキリスト教や，あるいはキリスト教社会主義そしてアーノルド・トインビーのセツルメントの運動へ理解と同調と

注（21） 前掲，31頁。

を表明し，他方，ドイツ社会民主党によって代表されたマルクス主義（従って第二インターナショナルの思想）にも強い関心を示すというように，学問に志す青年として，一種，思想的な混迷状態にあった。また生活の面からみても，専修学校をはじめ，いくつかの非常勤講師などの職を得ていたとはいえ，精神的にも物質的にも不安定な情況にあったのではないか。

また日本全体としてみても，日露戦争に辛うじて勝った後，その講和条約に不満な民衆の抵抗としておこった日比谷の焼打ち騒動に象徴されるように，日本の社会は，何ともいえぬ停滞と沈鬱な時代に入っていった。戦争後の景気後退に加えて，民衆の生活難が深刻となり，政府批判に華々しい論陣を張った平民社も分裂して，日本の社会は急速に「閉塞の時代」に突入，やがて大逆事件となって，明治人は，幕末以来，かつてない暗い世相を迎えることになる。河上が「無我苑」と称せられる一種の新興宗教のような運動に没入したのは，こうした「時代閉塞」の雰囲気を背後に感じていたからではなかろうか。

（四）

「無我苑」への参加を決意した明治39年初頭の時期，河上は一種の懐疑主義に陥っていたと考えられる。というのは，『社会主義評論』において，自己の活路を見出そうとした河上は，社会主義に傾倒するには，書物を通じて認識した社会主義が，現実の社会主義運動との距離がありすぎ，これを全面的に信ずる気持になれず，さりとてどのような思想的基盤に立つべきかについて，これといって確固たるものを見出しえなかった。いわば，一種の虚無的状態に陥っていたとき，ここに伊藤証信の無我愛の運動を見出したのである。

河上は，その指導者伊藤証信との出会いについて，『自叙伝』につぎのように書いている。「私は若い頃，伊藤証信氏に強く影響されたというのは，全く事実である。しかしその時の事情は殆んど誰にも理解されていない[22]」。このような書き出しで始まった彼の告白は，要するに，バイブルにあらわれた山上の垂訓，「人もし汝の右の頬をうたば，左をも向けよ……」というキリスト教の絶対的非利己主義の思想を，無我愛を主張する無我苑の運動に発見して驚喜したことを，感動をもって書き綴っている。

> 「しかし文字通り之を実行に移すとなると，私は此の世に生きて行けなくなると思えたので，そうした疑惧が，長い間私をして之が実行に突き進むことを躊躇せしめた。しかし，人間の生活態度としての斯かる絶対的非利己主義は，私にとって疑うべからざる真理だと思えた[23]」。

こうしたキリスト教の信仰に一種の憧憬をもっていた河上の前に，「無我の愛」を唱える，「絶対的非利己主義」を正面に掲げた運動があることを知って，「現代の日本にこうした主義を文字通り実践に移しつつある人が，ただの一人でも，ともかくも現実に存在しているという事実，その事実

注（22）河上肇『自叙伝』，第1巻（岩波文庫版），96頁。
（23）前掲書，97頁。

を知ったことが，躊躇しつつあった私を決定づけた。私はそのおかげで初めて絶対的非利己主義の道に突き進むという決意をなしえた」と述懐している。

しかしやがて，これは河上のいわば「ひとり合点」で，「同氏の謂うところの無我愛なるものが絶対的非利己主義と何の縁もなきもの」[24]であることが明らかになった。すなわち，彼の言葉を借りれば，「強姦するのも無我愛の発動である」[25]というような，いわば常軌を逸した伊藤証信の教義は，次第に彼にとって耐え難いものとなり，これを脱会するのであるが，おそらく彼は，社会主義――ここでは具体的には平民社の運動を意識しているが――に求めようとして得られなかった「絶対的非利己主義」を，無我苑に見出したと思い，一意その運動に専心した。しかし熱狂から醒めてみれば，その「無我愛」なるものが，「絶対的非利己主義」とは似ても似つかぬものであり，失望して無我苑を去るということになる。『自叙伝』でみる限り，彼のこの運動にたいする評価は，きわめて否定的で，その思想に何らの寄与をしなかったように記されている。

「果してそうであろうか」と疑問を感ずる反面，「あるいはそうかもしれない」という，何とも言えぬ感慨が沸くが，ただひとつ，この運動を，河上はあたかも弊履の如く打ち捨てたにしても，伊藤証信の思想的影響は，意外に広範囲に同時代の人々に及んでいて，これが邪教にせよ真実の宗教にせよ，その社会的意義について，ほとんどふれていないことが気になる。何よりも無我苑の運動は，当時の社会主義者とどのような関係にあったのであろうか。

おそらく彼の門下，あるいはその影響下にあった人と思われる千葉耕堂は，その『無我愛運動史概観』[26]のなかで，機関紙『無我の愛』の明治38年10月25日号『脱宗号』において，伊藤がその僧籍をおいている真宗大谷派から異端視され，「無我愛運動を中止するよう」勧告をうけたところから，僧藉を返上して，脱宗する経緯を特集し，大きな反響を呼びおこしたことにふれ，多くの知名人から反応があったことを述懐している。そのなかに，徳富蘆花，幸徳秋水，綱島梁川，堺利彦および内山愚堂があげられている。

幸徳は，中江兆民の門下から出発，アナキストとして，また一代の文章家として知られ，堺はさきにふれたように，日本共産党創立者のひとりであった。内山愚堂は，箱根太平台・林泉寺の住職を勤めていたが，明治44年，幸徳等とともに大逆事件に連座したことは周知のところであろう。伊藤の主張が，とりわけ社会主義者の共感を得たのは，一体何故であろうか。河上が脱会した後も，伊藤の運動は続き，明治43年4月1日には，『我生活』第1号を発刊，その「信念」と称して，「一，我々の周囲は，一一，皆極めて面白く，有り難く，尊く，そうして可愛いものである」から始まる四ヶ条の項目を発表している。興味深いのは，堺利彦は，唯物論の立場から，これを批判しつつも，なお評価していることで，堺と伊藤とはその後も相互に論争相手としての関係が続き，河上はむしろ伊藤から遠ざかり，従って堺とも相識る機会に恵まれなかった。

注（24） 前掲，98頁。
（25） 前掲，97頁。
（26） 千葉耕堂『無我愛運動史概観，付伊藤証信先生略伝』，昭和45年，無我愛運動史料編纂会，29～30頁。

筆者が，河上との関係でこの運動を執拗に追求するのは，「無我愛の運動」は，意外のところに意外の支持者をもっているからである。明治43年，明治天皇暗殺の陰謀の廉により，幸徳伝次郎以下24名が検挙され，翌44年1月，一審にして最終審，非公開で，はじめは24名が死刑の判決，その後，幸徳以下12名が死刑，他の12名は死一等を減じられて終身刑となった。このいわゆる「大逆事件」に際し無我愛運動の機関紙『無我の愛』第28号は，「大逆事件の啓示」と題し，これにふれたところ，内務大臣から安寧秩序の廉を以て発行禁止を命ぜられ，伊藤は五日間の労役を課せられ，留置されている。出獄の際，福田英子，堺利彦，大杉栄が出迎えたと記されている。[27] してみると堺利彦とは，相互に論争を交わしながらも，交友関係はつづいたらしく，堺の影響下にあった大杉栄や荒畑寒村にしても同様であった。[28]

伊藤証信とその妻あさ子を中心とする無我愛運動は，第一次大戦後，大正9年，精神運動社を設立，宗教的色彩の強い運動をおこし，やがて社会主義運動の活発化とともに，右翼的あるいは国家主義的傾向を帯び，解散するのである。『社会主義評論』に展開された西欧社会主義の紹介と，現実の社会主義運動の乖離のなかで苦悩を重ねつつその熱狂の醒めやらぬうちに，奇妙な精神主義的運動ともいうべき無我苑に没入する姿，これは，河上肇の思想が，社会主義に強く影響されながら，同時に志士仁人としての本来の姿から脱却できず，いわばその両者の間で放遑していたということができよう。

思想家河上肇を理解しようとすれば，どうしてもその根底に，長州武士そして志士仁人を見据えないわけにはいかない。その意味で同じく志士仁人としての東洋的な倫理観を根強くもちながら，アナキズムに陶酔し，制度としての天皇制そのものにきびしく対決しつつも，天皇個人にたいしては，他のアナキスト，たとえば管野スガ，宮下太吉，古河力作あるいは内山愚堂などとは異なった倫理観の上に立っていた幸徳秋水と酷似しているといえば，言いすぎであろうか。

河上肇の思想を考え論ずる場合，同時代人幸徳秋水との対比は興味深いものがあるが，河上は大逆事件について，全くふれていないと同じく，幸徳にたいしても格別強い関心を示しているとは言い難い。ただ，日本の社会主義が，選ばれたる者として，上からの救済者として大衆を導くという意味における志士仁人の思想に，その基礎をおくことが大きな特徴であるとすれば，河上はまさに，生涯を通じて西欧的合理主義に基づく社会主義を信奉しつつ，しかも本質的には東洋的な儒教主義を色濃くもつ志士仁人ではなかったかと思う。そしてその両者の矛盾からする苦悶は，実にこの『社会主義評論』と『無我苑』の頃から始まる。そしてその苦悩は生涯を通じて彼の行動を規定しつづけるのである。

（経済学部教授）

注（27） 柏木隆法『伊藤証信とその周辺』，不二出版，1986年，181頁。
（28） 前掲，188～189頁。